

にそれらの情報を付加可能.

4) 治療計画装置 (BrainSCAN) : IMRT をはじめ色々な治療計画が可能となっている.

当科では昨年7月より稼働を開始し本年4月末までに体幹部治療を97例に行った. 肺腫瘍の治療は74例, 肝腫瘍は23例であった. 再照射例を除き, また2ヶ月以上の経過観察が可能であった症例を対象に解析を行い, 肺/肝それぞれ70/20例であり, 奏効率は86/85%であった. 1アークでの治療を基本としているが grade 2 の放射線性皮膚炎の1症例を除き, grade 2 以上の有害事象は認めていない. 肺病変については4月末時点で局所制御率は100%である. 肝腫瘍に対しては徐々に線量アップを行い可能な部位には肺腫瘍と同じ線量を現在では用いている.

15 複数回のガンマナイフ治療を施行した転移性脳腫瘍症例の検討

佐藤 光弥・森井 研・秋山 克彦
五十川瑞穂*

北日本脳神経外科病院脳神経外科
新潟大学脳研究所脳神経外科*

ガンマナイフ治療は, 1回の照射で頭蓋内疾患を制御する治療方法として普及した. しかし, 転移性脳腫瘍の場合には, 再発に対して複数回の治療も可能であることが, 通常的全脳照射と比較して利点になっている. 当施設での現状と効果や問題点について検討した. 2006年5月31日まで, のべ1,429例の転移性脳腫瘍にガンマナイフ治療を施行した. そのうち複数回の治療を受けたものは239例であった. 複数回の内訳は2回が175例, 3回が47例, 4回以上が17例であった. 初回治療時の腫瘍縮小効果が明らかで, QOLの維持に有用であった症例が複数回治療の適応となっている. 複数回治療の効果も, 初回治療と同様に期待できるが, 全身状態が進行している場合には, 治療を断念する選択も考慮する必要がある. その決定は, 原発巣を治療する主治医と患者自身とガンマナイフ治療医が十分にコミュニケーションをとってなされるべきであると思われる.

16 早期胃癌におけるセンチネルリンパ節の検討

中川 悟・梨本 篤・藪崎 裕
土屋 嘉昭・佐藤 信昭・瀧井 康公
野村 達也・神林智寿子・田中 乙雄

県立がんセンター新潟病院外科

【目的】早期胃癌におけるセンチネルリンパ節 (SN) の同定および微小転移 (MM) を検討した.

【方法】

1) SN : 早期胃癌80例を対象とした. ICG色素法を用い49例には漿膜側より31例には術中内視鏡により注入し, 着色リンパ節 (GN) を摘出し, GN同定率と偽陰性割合を検討した.

2) MM : リンパ節転移陰性とされたpSM癌38例を対象とした. 全摘出リンパ節をCAM 5.2にて免疫染色し, MMの有無を検索した.

【結果】

1) SN : リンパ節転移は6例に認められた. 平均摘出GN数は3.8個, GN同定率は98.6%であった. リンパ節転移を認めた6例中4例でGN以外に転移を認め偽陰性割合は66.7%であった.

2) MM : 38例中4例 (10.5%) にMMを認めた.

【結語】少数ながら早期胃癌においてもMMは存在する. 偽陰性を66.7%に認めICG色素法によるGN同定法による縮小手術には慎重である必要があると考えられた.

17 Stage IV胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の検討

藍澤喜久雄・佐野 文・森岡 伸浩
鳥越 貴行・宮下 薫

燕労災病院外科

【目的】Stage IV胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の治療成績を検討する.

【方法】手術的Stage IV胃癌243例中, 姑息切除あるいは減量手術となった159例を検討対象とした.

【結果】肝転移, 腹膜転移のいずれかを有する症例は119例 (74.9%), 両者が陽性の症例は15例 (9.4%) であった. 手術の郭清度はD1以下が88

例 (55.3%), D2以上が71例 (44.7%) で, 術後化学療法施行例は113例 (71.1%) であった. 術後在院死亡率は17.0%, 手術直接死亡率は3.1%であった. 全症例の50%生存期間は231日で, Stage IV胃癌非切除例の63日に比べ, 有意に長かった. また, 化学療法施行例では275日と非施行例の164日に比べ, 有意に延長がみられていた.

【結語】Stage IV胃癌に対する姑息切除・減量手術症例の在院死亡率, 手術死亡率は高く, 適応決定には慎重を要する. 今後, 術前化学療法の有用性, さらに非切除化学療法との間で治療の優越性を比較検討する必要がある.

18 食道扁平上皮癌に“いわゆる癌肉腫”を合併した1例

星野 芳史・河内 保之・熊木 大輔
岡村 拓磨・佐藤 洋樹・渡邊 隆興
西村 淳・新国 恵也

長岡中央総合病院消化器病センター

今回, 胸部中部食道癌に隣接した“いわゆる癌肉腫”を合併した症例を経験したので報告する. 症例は50代男性であり, 嚥下困難を初発症状として発症し, 近医を受診した. 上部消化管内視鏡検査にて胸部中部食道に表面平坦なほぼ全周性の腫瘍を指摘され, 当院内科に紹介され精査入院の結果, 生検にて中等度異型扁平上皮癌と一部肉腫様退形成を示す胸部中部食道癌の診断にて当科に転科となり, 胸腔鏡下食道切除, 再建術を施行した. 切除食道の標本の病理所見では扁平上皮癌に隣接する“いわゆる癌肉腫”を認めた. 手術所見ではT2N3M0で病期分類はstage IIIであった. 術後経過は良好であり, FP療法による術後化学療法を1クール施行した後退院となった. 食道の癌肉腫は, “いわゆる癌肉腫”, 偽肉腫, 真性癌肉腫の三つに分類され, 比較的まれな疾患である. 今回の症例は肉眼的所見で3型を示す食道扁平上皮癌に隣接した1型の癌肉腫を認めた. 文献的考察を加えて報告する.

19 70歳以上の高齢者食道癌に対する根治的化学放射線療法後のSalvage手術

牧野 成人・神田 達夫・小林 和明
池田 義之・松木 淳・小杉 伸一
大橋 学・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器・一般外科

【目的】高齢者にとって食道癌根治手術は非常に侵襲が高く, 切除可能であっても根治的化学放射線療法(CRT)を選択することが多い. しかし癌の遺残, 再発をきたし, 結果的にSalvage手術を希望する症例があり, 当科で経験した3例について全Salvage症例との比較も含めて報告する.

【対象】当科における全Salvage手術16例中, 70歳以上の3例が対象.

【結果】3例全例とも根治手術可能であったが, うち2例は高齢を理由に根治的CRTを選択した. 全Salvage症例と比較し術後在院期間が長い傾向にあったが, 致命的な術後合併症はなく元気に退院した. 2例で病理組織学的に剥離断端陽性(R1)であった. 2例は15および22ヵ月後に原病死, 1例は15ヵ月後に他因死した.

【考察】高齢者Salvage手術例は全Salvage手術例に比べ術後在院期間が長く, 組織学的剥離断端陽性(R1)となる傾向にあるが, 生存期間の延長などが期待できる.

20 切除不能大腸癌に対する抗癌剤を用いた時間治療の有効性

宗岡 克樹・白井 良夫*・若井 俊文*
横山 直行*・坂田 純*・畠山 勝義*

新津医療センター病院外科
新潟大学大学院消化器・一般外科
学分野(第一外科)*

【目的】抗癌剤の時間治療(chronotherapy)では, 5-FUは午前3時頃, CPT-11は午後7時頃, CDDPと1-OHPは午後4時頃が至適投与時間とされる. 本研究では, 切除不能大腸癌に対する時間治療の有効性を検討する.

【方法】切除不能な大腸癌術後再発の30症例を